# 「パラメター」再考
## ――ミニマリストプログラムの見地から――

# Parameters in Minimalist Program

村　杉　恵　子
Keiko MURASUGI

Abstract

Syntactic Parameters are considered to explain the properties of languages. For example, the position of syntactic heads in phrases is determined by the head-directionality parameter. Whether a language is head-initial or head-final is set for the language. In this paper, we present an analysis that parameteric variations are not determined by a language, but are explained by the syntax of the language.

The evidence for the hypothesis is drawn from Saito's (2018) analysis that the contrast in pure complex NPs in English-type languages and Japanese-types languages does not reflect the typological characteristics of the two languages, but is to be explained by the labeling mechanism of {XP, YP} structures. We show that the approach to the linguistic variation in terms of labeling receives support from Japanese-speaking children's overgeneration of the complementizer *no* in complex NPs. Our proposal also provides further supportive evidence for Muraugi's (2020) proposal that a large part of the acquisition of syntax is the acquisition of how {XP, YP} structures are labeled in the target language.

## 1. はじめに

生成文法は，ヒトに賦与されている言語知識に在する普遍的な文法特性の解明をめざす言語理論である。世界の言語の文法には普遍性がある。一方で言語には多様性もある。 Chomsky（1981）は，言語の多様性を理論的に説明する仮説として，「原理とパラメターのアプローチ」を提案している。この仮説によれば，普遍文法には，どの言語にも共通する絶対的普遍性の特徴を担う原理と，言語によって異なる相対的普遍性の特徴を担う媒介変数（パラメター）が組み込まれている。

「原理とパラメターのアプローチ」によれば，人間言語の文法には，普遍文法を構成する一般的原理がある。その一方で，言語間の多様性（すなわち個別言語の文法特性）もまた普遍文法によって限定される。（未定，あるいはデフォルトではない）パラメター値は，言語経験によって決定され，したがって，言語獲得とは，当該言語の語彙を習得するプロセスに加え，一次的資料から経験（肯

定的証拠）によって当該言語のパラメター値の決定するプロセスでもあると考えられる。

半世紀以上にわたり精緻化され続けてきた生成文法理論においては，現在，ミニマリスト理論（Chomsky 2013, 2015）として，併合（Merge）とラベル付け（Labeling）が普遍文法の一部であるものとして提唱されている。本稿では，従来，言語間に存在する相違のありさまを説明する理論的仮説として考えられてきたパラメターについて再考する。言語間変異は，言語型によってその値を異とするのではなく，その根本には主要部の強さに関するパラメターがあると提案する Saito（2018）の仮説を，言語獲得の側面から支持する。

## 2. 言語間変異とパラメター：複合名詞句の構造に関するパラメター

1980 年代の初頭から提案されてきたパラメターに関する仮説には，主要部パラメター（head-directionality parameter），下接条件において移動に関して役割を果たす境界節点（bounding node）に関するパラメター（Rizzi 1982），当該言語の定形節において音形をもつ主語が義務的か否かに関わる「空主語パラメター」（pro-drop parameter）（Chomsky 1981, Rizzi 1982, 1986 等），関係節などの連体修飾節構造が補文標識を含むものか否かに関するパラメター（CP/TP Parameter）（Murasugi 1991）等があるが，これらは，いずれも，言語間変異を説明するものとして提案されている仮説でもある。

たとえば空主語仮説は，（大人の）日本語の関係節の中に移動の制約としての下接条件にしたがわない例がある事実についても関係する（Perlmutter, 1972）。Saito（1985）は，（1）に示すように，日本語の名詞句が関係節化される場合には，移動の制約（下接条件）に抵触する例がみとめられるが，それは日本語型の言語には空項が許されるためであるとする。その一方で，理由や方法などの付加詞の移動については，（2b）のように下接条件以上に厳しい点があり，（2a）と（2b）対照性はに見る日英語の相違点のひとつであると指摘する。

（1）［［［$e_i$ $e_j$ 着ている］洋服 $_j$］が汚れている紳士 $_i$］

（2）a. the reason［(why$_i$) Mary thinks [that John left $e_i$]］

b. *［花子が［太郎が $e_i$ 帰ったと］思っている］理由 $_i$］

このようなパラダイムについて，Saito（1985）は，日本語の関係節構造が英語の関係節構造とは異なるものである可能性を示唆する。空代名詞のあらわれうる環境では関係節は基底生成される（したがって移動は関与しないため，移動の制約も適用されない）。一方で空代名詞があらわれえない環境では，移動が関与し，移動の制約が適用される。しかし，日本語の関係節は補文標識を含まない構造をもつがゆえに，移動の制約に関して，英語などの補文標識を含む関係節とは異なるふるまいを示すという仮説である。

この統語構造に関する言語間相違に基づけば，日英語の複合名詞句に見られる典型的な相違もまた，英語は CP 構造をもち，日本語は TP 構造を持つことに起因すると説明されうる。日本語の複合名詞句は，補文標識を欠くがゆえに（3）に示すような言語間差異が示されると考えられる。*は当該の文や要素が非文法的であることを示している。

（3） a. ［魚が焼ける］におい
b. *the smell［**that** fish burns］

この複合名詞句の構造に関するパラメターの可能性を言語獲得から支持した研究に Murasugi（1991）がある。Murasugi（1991）は，人間言語の特徴として分裂文と関係節は多くの共通点を有し，両者は同形の補文標識をもつことを指摘する。英語では *that* がそれにあたる。

（4） a. It is in Boston that Amy ate lobster for the first time.
b. the fact that Amy is smart
c. the lobster that Amy ate

（4a）は分裂文，（4b）は純粋複合名詞句，（4c）は関係節を含む複合名詞句である。この分裂文と関係節との関係に関する特徴は日本語では観察されない。

（5） a. ［ロブスターを初めて食べたの］はボストンでだ
b. ［魚が焼ける］（*の）におい
c. ［エミが食べた］（*の）ロブスター

（5a）の分裂文では補文標識「の」が義務的に顕在化されるが，（5b）や（5c）のような複合名詞句において補文標識はあらわれえない。

ところが，（時制や，名詞句と名詞句との間に挿入される属格，代名詞の「の」，（分裂文の）補文標識などを既に獲得している）日本語を母語とする幼児は，2 歳から 4 歳ごろに（6）や（7）に示すような「の」の過剰生成を産出することがある。

（6） a. シュークリームつくってんのにおい
b. 踊ってるのシンデレラ
c. トウモロコシ食べてるのぶたさん
d. パパが書いたのタコの絵

（7） a. ちがうのおうち
b. あたらしいのおうち
c. いじわるなのおばちゃん

この「の」はなにか。それはなぜ過剰生成されるのか。それを探るため，まず Murasugi（1991）は，日本語の大人の文法（東京方言）においては，属格，代名詞，補文標識は「の」という同一の音形をもってあらわされる分析を提示する。

（8） a. エミの本
b. 野蛮人の都市の破壊
c. 雪の日

d. 母からの贈り物

(9) a. 赤いの（赤いもの）
b. 母から届いたの（母から届いたもの）

(10) ロブスタを初めて食べたのはボストンでだ

その上で，Murasugi（1991）は，2 歳以降に複合名詞句内で過剰生成される「の」は補文標識であるとする仮説を提示している。その根拠の一つは，方言研究から得られている。

Murasugi（1991）は，言語獲得中期から後期に見られる過剰生成が属格ではないと考える根拠の一つを富山方言話者の幼児から得られる事実から提示する。富山方言の大人の文法では，属格は「の」であらわされるが，代名詞と補文標識は「が」であらわれる。

(11) a. エミの本
b. 野蛮人の都市の破壊
c. 雪の日
d. 母からの贈り物

(12) a. 赤いが（赤いもの）
b. 母から届いたが（母から届いたもの）

(13) ロブスタを初めて食べたがはボストンでだ

そして，富山方言話者の幼児は（14）のように「の」ではなく「が」を過剰生成する。

(14) a. 赤いが帽子
b. アンパンマンついとるがコップ（Murasugi, 1991）

もし過剰生成された「の」が属格であれば，富山方言でも「の」が過剰生成されるはずである。しかし実際には（14）にあるように「が」が過剰生成される。したがって，2 歳以降に観察される複合名詞句内での過剰生成は，属格ではなく，代名詞か補文標識であることになる。

問題の「の」が代名詞ではないと考えられる根拠のひとつは，過剰生成の時期，当該の幼児が名詞句と名詞句との間に属格を挿入することができる段階にあることにある。この時期の幼児は「ママの名前」「お部屋のおかたづけ」「お山のお花」など名詞句（「ママ」「お部屋」「お山」）と名詞句（「名前」「おかたづけ」「お花」）との間に属格が挿入されなくてはならないことを知っている。もし（14）において「が」が代名詞であるとすれば，名詞句間の属格挿入をすでに獲得している幼児は（15）のような名詞句を生成することが予測される。

(15) a. [$_{名詞句}$赤い [$_{代名詞}$が]] の [$_{名詞句}$帽子]
b. [$_{名詞句}$アンパンマンついとる [$_{代名詞}$が]] の [$_{名詞句}$コップ]

もし過剰生成された要素が代名詞であるとすれば，代名詞「が」を主要部とする名詞句（「赤いが」「アンパンマンついとるが」）と名詞句（「帽子」「コップ」）との間に属格が挿入されるはずである。しかし，実際はそのような発話は引き出されない。したがって，過剰生成されているのは代名詞でもない。したがって，過剰生成されている要素は補文標識であることになる。

もし，過剰生成された要素が補文標識であるとすれば，このときの幼児の複合名詞句は語順こそ異なるが英語の複合名詞句と「同じ」構造であることになる。

(16) a. [the lobster [$_{CP}$[$_{補文標識}$ that] [Amy ate]]]
b. [$_{CP}$[エミが食べた] [$_{補文標識}$ の] ロブスター]]]

もしそうであるならば（6)–(7)，(14）のような過剰生成をしている幼児は（語順は日本語の大人の文法に準拠するものであるが）英語と「同じ」複合名詞句の構造 CP をもっていることになる。日本語を母語とする幼児は，言語獲得の中間段階で日本語の複合名詞句として補文標識を含む英語のような CP 構造を仮定すると考えられるのである。このことは，世界の言語の複合名詞句には CP 構造と TP 構造が可能な文法のオプションとして存在しており，幼児の言語獲得の中間段階で，母語の値とは異なる値を設定する可能性を示唆している。

言語間相違を説明するパラメターのひとつとして CP/TP 構造のパラメターがあるとすれば，複合名詞句に関して日本語と同じふるまいをすると予測される韓国語も日本語と同じ記述的特徴を持つと予測される。実際, その予測は Kim and Sells（2017）からも支持される。大人の文法において，連体修飾節は補文標識を伴わずにあらわれる[1)]。

(17) a. [sayngsen-i tha-nun] naymsay
fish-NOM burn-Adn. Pres. smell
'the smell of fish burning'
b. [chayk-ul pha-n] ton
book-ACC sell-Adn. Past money
'the money from selling books'

そして，韓国語を母語とする 2 歳児も，分裂文の主要部にもあらわれる補文標識 *ke(s)* を，複合名詞句や形容詞句と名詞句との間に過剰生成する事実が Kim（1987）などによって指摘されている。

(18) Acessi otopai tha-**nun** (*) **ke** soli ya.
man motorbike ride-adnom ***KES** sound is
'It's the sound of a man riding a motorbike.) (Kim, 1987)

以上の議論は，複合名詞句において構造的な相違が，英語型の言語と日本語型の言語には存在することを示唆している。英語型の言語の関係節は *that*（補文標識）を主要部とする CP 構造をもつ。

1）Matsumoto, Comrie and Sells（2017）は，類型的に，名詞句に前置する文修飾句は，多くの言語において，日本語タイプと英語タイプのどちらに分かれるのかについて考察する論文を収録している。

一方，日本語型の連体修飾節は補文標識を主要部とするCP構造ではなく，Tense（時制）を主要部とするTP構造のようなものをもつと考えることができる。

## 3. Φ素性・{XP, YP}のラベル付け・弱主要部・強主要部のパラメター

20世紀末に提案されたCP/TPパラメターは，Saito（2018）によってミニマリスト理論におけるラベル付けの仕組みの言語間相違を考察する中で，再考をみることになる。Saito（2018）は，複合名詞句に見る相違は，当該言語に「一致」があるか否か，当該の構造が適切にラベル付けされるか否か，そして主要部の強度によるものであると提案する。日英語のタイプの言語間にある典型的な相違を生み出す連体修飾節の構造は，その主要部が弱主要部（たとえば動詞の連体形（活用））か，あるいは強主要部（たとえば補文標識 *that*）かによって導き出される帰結であるとし，その帰結として複合名詞句にみる典型的な言語間変異の仕組みを説明する。たとえば，英語においても主要部が弱主要部 *of* である（19c）のような場合には，日本語と同様のふるまいが示されると指摘している。

（19） a. ［魚が焼け［$_{\text{弱主要部・連体形}}$**る**］］におい
b. *the smell [**that**$_{\text{strong}}$ fish burns]
c. the smell **of**$_{\text{weak}}$ fish burning

この仮説は，言語間相違を説明すると考えられたパラメターの在り方に新たな光をあてる。この仮説によれば，言語間相違の引き金となるのは，主要部の強さにある。同じ言語の中でも，主要部の強弱によって必ずしも言語間相違を生み出さない帰結が得られる場合があることを示唆するのである。

この分析の詳細をみる前に，Saito（2018）の議論の前提となるミニマリスト理論で普遍的な文法についてみておこう。先にも述べたように，ミニマリスト理論においては普遍文法として併合とラベル付けが提案されている。

（20） a. $\alpha$ determines the label of $\gamma = \{\alpha, \beta\}$ if
(i) $\alpha$ is head and $\beta$ is a phrase or
(ii) $\gamma$ fully contains $\alpha$ but not $\beta$.
b. The label of $\gamma = \{\alpha, \beta\}$ is $\langle F, F \rangle$ if
$\alpha, \beta$ are both phrases and their heads share a significant feature F.

この提案の概略を述べるとすれば，以下のようになるだろう。

（21） a. 併合：二つの要素$\alpha$と$\beta$から構成祖$\gamma = \{\alpha, \beta\}$を形成する。
b. ラベル付け：併合によって形成された$\gamma$の性質を決定する。

併合は，たとえば，他動詞（V）と名詞句（NP（DP））から$\gamma = \{V, NP(DP)\}$を形成する。$\gamma$が主要部（語・形態素）と句を含む場合には，前者である主要部（語・形態素）が$\gamma$の性質を決定する。したがって，

$\gamma$ = {V, NP(DP)} は，VP と解釈される。一方，$\gamma$ = {XP, YP} のように，二つの句（XP, YP）を含む構成素がある場合には，一定の条件下でラベル付けがなされる。文は，主語の NP（DP）と述部 TP = {T（時制），VP} を併合することで形成される。この場合は，「一致」（Agreement）により，T は主語の人称や数などを表すことから，主語と T が共有する一致素性が $\gamma$ の中心となり，$\gamma$ の性質を決定する。

この定式化は，多くの言語現象を説明するものではあるが，一方で，この定式化のみでは，多様な言語間変異はとらえきれない。なぜならば，すべての言語が，性や数などの「一致」を含むとは限らないからである。では，性や数などの「一致」を含まない言語では，どのように $\gamma$ = {XP, YP} はラベル付けがなされるのか。日本語のような言語の類型的特徴は，いかなるラベル付けのメカニズムを仮定すれば説明されうるのか。

文法理論の発展は，ヨーロッパ系言語の記述的研究に多くを依拠しているが，文法理論は，「原理とパラメター理論のアプローチ」がめざしたように，どの言語にも共通する普遍性のみならず言語間変異を説明するものではなくてはならない。ここに，ヨーロッパ系言語とは類型的に異なる日本語などの言語研究に光があてられる所以がある。日本語のような言語からの一般理論への貢献は，理論の精緻化に重要な役割を果たす。

Saito (2016) は,「一致」を欠く日本語の文がどのようにラベル付けされるのかに注目し, たとえば, 日本語に特有の (22a) のようなかき混ぜ文や (22b) のような多重主語が, なぜ英語では (23a) や (23b) に示されるように非文となるのかを問う。

(22) a. 太郎を花子が叱った.
b. 山が木がきれいです.（Kuno, 1973）

(23) a. *Taro, Hanako scolded.
b. *Mountains, trees are beautiful.

二つの句を含む構成素 $\gamma$ = {XP, YP} がある場合には，一定の条件下でラベル付けがなされるが，Saito（2016）は，$\gamma$ = {XP, YP} のラベル付けの仕組みには違いがあり，このラベル付けの仕組みの相違が，日本語のような言語に特有のかき混ぜ文や多重主語のラベル付けされうることを認可する要因であると提案する。

この提案によると，日本語型の言語の場合には，格助詞や述語活用が句をラベル付けにおいて不可視化する。例えば日本語の文は $\gamma$ = {NP- が, TP} となるが，格助詞「が」が主語を不可視的にするため，$\gamma$ は TP としてラベル付けされる。(24a) のような場合には，主語以外の要素を文頭に移動し，文と併合することで自由語順が可能となるが，このようなかき混ぜ文においては，目的語を文頭に移動すると $\gamma$ = {NP- を, TP} が形成される。この「を」が目的語を不可視的にするため，$\gamma$ は TP としてラベルけされる。同様に（24b）のような多重主語文も，$\gamma$ = {NP- が，TP} となるが，格助詞「が」が主語を不可視的にするため，$\gamma$ は TP としてラベル付けされる。この仮説は，言語間変異が，二つの句が併合される場合のラベル付けメカニズムの相違によって生じる可能性を含意している。[2)]

2）Murasugi（2020）ではこの仮説を幼児の言語獲得の側面から検証している。それによると，世界の幼児言語に

さらに Saito（2018）ではこの提案に再考を加え，反ラベル付けの性質を担う格助詞や動詞の活用（終止形や連体形）などは弱主要部であるとし，弱主要部の補部が，それを支配する上位のラベルを決定することができると提案している。

（24）Search into $\gamma = \{\alpha, \beta\}$ for a label. If $\alpha$ is a weak head or search into a finds a weak head, then search on the $\alpha$ side is cancelled. Then, search continues only on the $\beta$ side. (Saito, 2023)

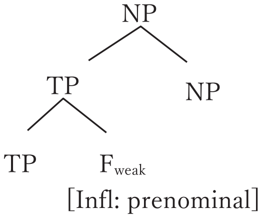
この仮説は，かき混ぜ文や多重主語文のみならず，先に述べた日本語型と英語型の言語の代表的な相違の一つとされる連体修飾節の多様性を説明しうる。

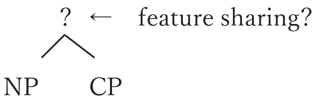
（25）a. 誰かがドアを閉める音
　　 b. 屋根がきれいな家

先にも述べたように，（25）のような例は英語のいわゆる複合名詞句の構造としては許されない。先の典型的な例を再掲しよう。

（26）（＝(3)）
　　 a. ［魚が焼ける］におい
　　 b. *the smell [**that** fish burns]

Saito（2018）によれば，このような純粋複合名詞句は，文（TP）と名詞句（NP）が併合されることにより $\gamma = \{$CP, NP(DP)$\}$（英語型）あるいは $\gamma = \{$NP(DP), TP$\}$（日本語型）として形成されると考えられている。日本語型でこのような構造が許容されるのは，連体修飾節が連体形を有するが故である。（27）に示すようにその述部活用（連体形）が，反ラベル効果により TP を不可視的にするため，$\gamma$ は NP としてラベル付けがなされる。一方，英語の場合は，*that* が強主要部であり，（28）のような構造では，素性共有（feature-sharing）がなされず，NP と CP を支配する上位の範疇にラベル付けがなされない。このため，（26b）のような名詞句は非文法的となると説明される。

（27）



（28）



観察されるいわゆる主節不定詞の諸特徴は，当該言語の {XP, YP} のラベル付けの仕組みが未獲得であることを示すものであり，幼児の言語獲得の中間段階とは，{XP, YP} のラベル付けを獲得する段階にあると提案されている。

この仮説に基づけば,(26)に示された日本語と英語の文修飾句の相違を決定づけるパラメターは「言語」という単位に存するのではない。主要部が弱主要部か強主要部かによって説明されうることになるのである。

次節では，この Saito（2018）の提案が，言語獲得の観点からも支持される可能性を議論する。2節で概観した複合名詞句内の「の」の過剰生成はミニマリスト理論のもとでどのように説明されるのだろうか。

## 4.「の」の過剰生成再訪：弱主要部としての補文標識の音声化

言語獲得研究は，言語とはいつどのように，そして，それはなぜ獲得されるのかを問う科学である。第 2 節に概観した幼児の「の」の過剰生成については，言語獲得研究史において長く議論がなされてきたが，その議論にみられた混乱の原因のひとつには，その「の」は「なにか」は問われても，それは「なぜか」が問われる議論が少なかった点がある。

Murasugi（1991）は，2 歳から 4 歳ごろに過剰生成される「の」は補文標識であると提案する。それがなぜ過剰生成されるのかについては，文修飾構造は，パラメターとして CP 値か TP 値かいずれかの値を担い，幼児は言語獲得の途上で CP 値を（親の入力から得られないにもかかわらず）自らの普遍文法に基づいて適用すると説明する。この仮説によれば文修飾構造は，言語によって異なり，幼児の言語獲得の過程にはデフォルトの文修飾構造を試す段階があることになる。

ところが，もし Saito（2018）が提案するように，言語間変異が一致（Agreement）の有無と {XP, YP} のラベル付けの仕組みによるものであり，文修飾句の構造が，主要部の強さによって決定されるのであるとしたら,「の」の過剰生成はどのように説明されるのであろうか。補文標識の「の」はなぜ過剰生成されるのか。そして，それはどのように大人の文法へと移行するのだろう。習得可能性の観点からみて妥当な説明がなされうるのだろうか。

Murasugi（1991）を再考しよう。実は，改めて Murasugi（1991）を精査してみると，そこに提示されている幼児の言語事実には，その過剰生成の仕組みが単純に CP/TP パラメターとして説明されえない点が含まれていることに気づかされる。日本語を母語とする幼児は，単純に英語の補文標識と「同じ」性質の補文標識を過剰生成しているのではないと考えうる根拠がある。その根拠は日本語を母語とする幼児の過剰生成する純粋複合名詞句にある。

Murasugi（1991）によると，過剰生成は，純粋複合名詞句においても観察される。(6a）を（29）として再掲しよう。

(29)（＝(6a)）シュークリームつくってん<u>の</u>におい

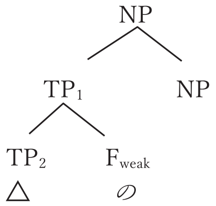
先にも述べたように，英語型の大人の純粋複合名詞句においては，この環境に補文標識 *that* はあらわれてはならない。繰り返し述べているように日本語では（30a）は自然な名詞句であるものの英語では（30b）は非文なのである。それは Saito（2018）によれば，補文標識 *that* が強主要部であるためである。

(30)（＝(3)）

a. ［魚が焼ける］におい
b. *the smell［**that** fish burns］

したがって，日本語を母語としている幼児に過剰生成されている補文標識「の」は英語の補文標識（*that*）とは異なる性質を担うものであるして考えざるを得ない。その補文標識は英語の強主要部とは異なり，弱主要部としての性質を担う要素であると考えられる。では，過剰生成される「の」はどのような弱主要部なのか。

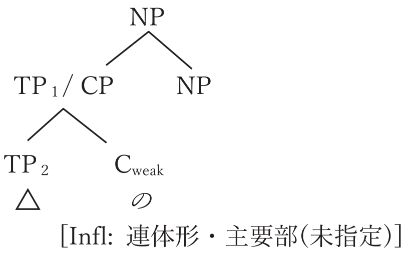
まず，一つの論理的な可能性として，過剰生成された要素が補文標識ではなく，TP に付随する弱主要部の音形的な具現化（仮に F）であるとしよう。その場合，過剰生成の時期の幼児の複合名詞句の構造は（31）のようなものであると考えられる。

（31）



もし F が「の」として過剰生成されているのであれば，$TP_2$ 内の構造は大人の文法とは異なるはずである。この仮説に基づけば，一見，幼児日本語でも幼児韓国語でも述部活用として連体形があらわれているようにはみえるものの，実際はその述部活用は，（27）に示された大人の文法とは異なっていると考えられる。述部活用（連体形）は F の位置で弱主要部として機能していないのである。このとき，F は「の」として音声的に具現化し，補部に述部活用（連体形）を含むロート（Rote）が $TP_2$ としてあらわれていると考えることができる。言語獲得の過剰生成の初期段階の典型的現象と矛盾することなく，述部活用の連体形を含む連体修飾節は，分析されていないまとまった形として形成されているといえる。

しかし，この論理的には可能な仮説は，空仮説として棄却せざるをえない。たとえ，過剰生成の時期に $TP_2$ は動詞の連体形を含むロート（Rote）としてまとまっている可能性は残されるとしても，この仮説には重大な問題が残される。なぜ機能範疇 F には，その音声的具現化として，分裂文の主要部と同じものが選ばれるのか。過剰生成された要素が単に F の具現化であるとすればどんな音形があらわれてもよいはずである。にもかかわらず，なぜ方言（言語）を超え，個人差もなく，一貫して補文標識「の」（東京方言），「が」（富山方言），*ke*（*s*）（韓国語）が，音声的に顕在化するのか。幼児が過剰生成する補文標識の音形が，「と」ではなく「の」であり，それは，分裂文と関係節との関係から導かれるとすれば，これまでの議論に立つとき過剰生成されている要素は補文標識でなければならない。さらに幼児の過剰生成する補文標識が，英語型の強主要部ではなく，弱主要部であるとすれば，そのとき幼児が仮定する構造は以下のようなものであると考えられる。

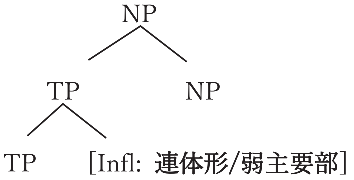
(32)




このとき，幼児は，弱主要部としての連体形と終止形の区分ができていないと考えられる。

では，幼児は過剰生成の段階からどのように大人の文法へと移行しうるのか。それは，日本語において多くの場合同形である終止形と連体形は異なるものであることを知ることがきっかけとなると考えられる。それは肯定情報から得られうる知識である。

(32)




この議論に説明力があるとすれば，日本語や韓国語を母語とする幼児は，複合名詞句としてデフォルトのCP構造を仮定し，当該の言語の補文標識の特徴である弱主要部を過剰生成する。したがって幼児は母語の主要部の強度については，パラメター値を変更する必要はなく，習得可能性には問題が生じない[3]。そして幼児は，動詞の述部活用の性質を獲得したときに過剰生成の段階を経て大人の文法に至ると考えることができる。

## 5. 結論

本稿では，「原理とパラメターのアプローチ」以来，人間言語の言語間変異の文法特性を説明すると考えられてきた統語的パラメターについて，ミニマリスト理論（Chomsky, 2013, 2015）の枠組みで再考した。特に統語特性の帰結として言語間相違が説明するとするSaito（2018, 2023）の提案を，言語獲得の面から支持した。

言語間変異はどこからくるのか。それは「言語型」によるのではない。それはΦ素性の一致の有無と{XP, YP}構造のラベル付けの仕組みの相違，さらに主要部の強度の違いによるものであると論ずるSaito（2018）の提案に基づき，本稿では，複合名詞句に見られる英語と日本語の相違と相

3）日本語型の複合名詞句がTP構造であり，英語型の複合名詞句はCP構造を持つというMurasugi（1991）で提案された仮説は，本稿の分析においても維持される。ただし，その構造の相違は，主要部の強弱の相違から得られる帰結によると捉えられるものであり，構造の相違自体が言語型の変異を説明するパラメターとなるのではないと考えるのが本稿の趣旨である。

同に焦点をあてた。特に，この提案が言語獲得の面から支持されるか否かを検証する上で，日本語型言語の獲得途上に観察される補文標識の過剰生成について再考し，それがSaito（2018）の分析により自然な説明が与えられる可能性を示唆した。

言語理論の構築にむけて，本稿から示唆しうる結論は二点あるだろう。一点は，パラメターの値は，言語別に設定されるのではなく，統語的な特性によって説明されるというものである。第二点目は，言語獲得に時間を要する要因は，Murasugi（2020）の提案するように，当該言語のΦ素性の有無と{XP, YP}構造におけるラベル付けの適用の獲得にあるという可能性である。それは，言語間で観察される相違が，主要部の強度と，Φ素性の有無に関する一致（Agreement）に基づくラベル付けのあり方に起因することを示唆する。

## 謝辞

本稿は，2023年9月7日に米国コネチカット大学言語学科にて口頭発表をした内容の一部をまとめたものである。齋藤衛氏，Željko Bošković 氏，William Snyder 氏，Diane Lillo-Martin 氏，Mona Anderson 氏をはじめ，フロアとの質疑応答から多くの洞察を得ている。本稿草稿・校正においては，齋藤衛氏，林慎将氏ならびに『アカデミア』編集委員から貴重な示唆を得た。また，本研究は2023年度南山大学パッへ研究奨励金I–A–2と，科学研究費基盤研究（C）20K00587により支援をうけている。ここに記して心より感謝する。

## 参考文献

Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht, Berlin.

————. 2013. “Problems of Projection.” *Lingua* 130, 33–49.

————. 2015. “Problems of Projection: Extensions.” In *Structures, strategies, and beyond,* ed. by E. Di Domenico, C. Hamann & S. Matteini, 1–16. Amsterdam: John Benjamins.

Kim, Shin-Sook and Peter Sells. 2017. “Noun-Modifying Constructions in Korean.” In *Noun-Modifying Constructions in Languages of Eurasia: Rethinking Theoretical and Geographical Boundaries*, ed. by Y. Matsumoto, B. Comrie & P. Sells, 59–89, Amsterdam: John Benjamins.

Kim, Young-Joo. 1987. “The Acquisition of Relative Clauses in English and Korean: Development in Spontaneous Production.” M.A. Thesis, Harvard University.

Kuno, Susumu. 1973. *The Structure of the Japanese Language*, Cambridge, Mass.: MIT Press.

Matsumoto, Yoshiko, Bernard Comrie and Peter Sells (Eds). 2017. *Noun-Modifying Constructions in Languages of Eurasia: Rethinking Theoretical and Geographical Boundaries*, Amsterdam: John Benjamins.

Murasugi, Keiko. 1991. *Noun Phrases in Japanese and English: A Study in Syntax, Learnability and Acquisition.* Doctoral dissertation, University of Connecticut.

————. 2020. “Parameterization in Labeling: Evidence from Child Language,” *The Linguistic Review* 37, 147–172.

————. 2023. “Parameters in Minimalist Program: Evidence from Child Grammar,” Talk at University of Connecticut. September 7th.

Perlmutter, D. M. 1972. “Evidence for Shadow Pronouns in French Relativization.” In *The Chicago Which Hunt*, Ed. by P. M. Peranteau, J. Levi, & G. Phares, 73–105. Chicago: Chicago Linguistic Society.

Rizzi, Luigi. 1982. *Syntax of Italian Syntax.* Dordrecht: Foris.

———. 1986. "Null Objects in Italian and the Theory of pro," *Linguistic Inquiry* 17, 501–558.

Saito, Mamoru. 1985. *Some Asymmetries in Japanese and their Theoretical Consequences.* Doctoral dissertation, MIT.

———. 2016. "(A) Case for Labeling: Labeling in Languages without $\phi$-feature Agreement," *The Linguistic Review* 33, 129–175.

———. 2018. "Kase as a Weak Head," *McGill Working Papers in Linguistics* 25, 382–391.

———. 2023. "On Labeling: From the Explanation of Rules by Principles to the Explanation of Principles," Talk at University of Connecticut. September 7th.